

いじめを速やかに解消した事例6（中学校第3学年女子）

～全教職員による組織的・多面的な対応～

問題の把握

第3学年女子Aは、バレーボール部で副キャプテンを務めるなど、リーダー的存在であった。体育大会が終わり、学級がまとまろうとしていたとき、Aの様子が変化し、元気がなく部活動も休みがちになった。中体連が始まろうとしていたとき、Aの外靴が何者かにカッターで切られるなどのいじめの事実があることが保護者からの連絡によりわかった。

対応状況

即時対応
情報収集
指導方針の確立
支援チームの編成
家庭訪問

担任は当該生徒及び関係生徒への事実確認を行い、実態把握を行った。また、管理職に状況報告を行い、指導方針を確立した。

生徒指導主事は、必要な支援を整理し、Aにかかわることができる職員による支援チームを編成した。

担任は学年主任と共に家庭訪問し、Aの保護者にこれまでの指導の経過を説明するとともに、Aの家庭での様子を聞いた。

中期対応
当該生徒への心のケア
学級、学年全体、部活動への指導
当該生徒の居場所づくり
保護者との連携

担任と生徒指導主事は、Aと他の女子に対する指導を行い、「いじめは絶対に許さない」という気持ちを伝えた。また、Aの保護者に対して、Aへのかかわりを深めてもらうよう依頼するとともに、Aの保護者に対する支援を行った。

担任は、スクールカウンセラーと協力してAの心のケアを行うとともに、Aに目標を設定させ、認めたり励ましたりする機会を多くした。

担任と副担任は、学級の生徒にいじめの事実を伝え、いじめの卑劣さや仲間を思いやる気持ちをもつことの大切さ等について訴えた。

学年の教職員は学年集会を開き、最高学年としての自覚を促した。

養護教諭は、Aが教室へ戻れない場合を考慮し、保健室等の居場所を用意し、Aが落ち着いて過ごすことができるよう配慮した。

バレーボール部顧問は、今後の部活動の在り方を、キャプテンを中心に話し合わせ、チームワークの大切さ等を指導した。

全教職員による多角的な支援により、Aは少しずつ落ち着きを取り戻し、通常の学校生活を送ることができるようになってきた。

長期対応
学級経営の見直し
校内研修の実施
全生徒に対する自己指導能力の育成

担任と生徒指導主事は、学級経営案の見直しを行い、積極的な生徒指導と開発的・予防的教育相談を取り入れた学級経営計画の改善を図った。

研修担当は、生徒指導や教育相談に関する校内研修を設定し、あらゆる場面で生徒指導の機能を生かした教育活動を行うよう働きかけた。また、備品の管理を徹底した。

本事例においては、加害生徒を特定することができなかったが、組織的かつ多面的な対応により、全校生徒に「いじめは絶対に許さない」という意識を醸成することができた。また、その後はAに対するいじめは発生していない。

いじめの問題を速やかに解消するためのポイント

- ・いじめの問題を担任だけに任せずに、組織的・多面的に対応する体制をつくること。
- ・生徒の実態を踏まえ、解決のための方針を明確にすること。
- ・「だれが」「なにを」「どのように」対応するかについて具体的にすること。
- ・すぐに対応すべき「即時対応」と、根本的な解決を目指す「中・長期対応」に分けること。